

# 日本における大型絵本の現状分析

## Analysis of large-size picture books published in Japan

杉村 智子<sup>1</sup>

SUGIMURA Tomoko

日本において2021年11月までに発行されている大型絵本277件の情報について、発行年、発行数、拡大率等の分析を行った。大型絵本は、通常サイズの絵本が拡大され発行されたもの（拡大絵本：236冊、85%）と、通常サイズの絵本が存在せず最初から大型で主に教育目的で発行されたもの（ビッグブック：41冊、15%）の2種類に大別された。日本における大型絵本は、ビッグブックが始めに発行され（1998年）、拡大絵本は後から発行された（1994年）。拡大絵本は、2003年から発行数が増加し、発行数のピークは2008年までで、毎年18～20冊が発行されたが2009年からは減少傾向に転じた。ビッグブックは1989年以来、発行数は年間5冊以下であることがほとんどであった。拡大絵本については、通常サイズの発行後10年以内に拡大絵本となったものが129冊（55%）であったが、30年から50年経過してから拡大絵本となったもの（38冊、16%）もあった。拡大絵本の縦幅はおおよそ30cmから60cmの間であり、50cmの本が最も多く発行されていた（67冊、28%）。また、1.7倍から2.0倍までに拡大されるものが多かった（170冊、72%）。

### 目的

幼児教育や保育の現場においては、絵本の読み聞かせをはじめ、子どもが絵本を通じてさまざまな活動を行うことは、ことばや人間関係の発達に寄与することとして重要視されている。會澤・片山・高橋（2019）は、1956年版から2017年版までの幼稚園教育要領（文部科学省）においても、絵本を介した活動により、自己の言葉を豊かにしたり、他者と心を通わせることが重要視されていることを指摘している。すなわち、絵本を介して、「先生や友達と心を通わせること」、「豊かなイメージを形成すること」、「豊かな言葉や表現を身に付けること」をねらいとして、言葉に対する感覚を豊かに育むための保育実践が期待されている（會澤・他、2019）。

このような背景から、乳幼児期の子どもを対象とした絵本の読み聞かせにおいて、望ましい絵本の内容や読み聞かせ方法、読み聞かせの環境設定等についての実証的研究や取り組みは数多く多くなされている（e.g., 雨越・森下, 2020; 大元・青柳, 2012; 玉瀬, 2012; 並木, 2012）。例えば、玉瀬（2012）は、子どもに好まれる読み聞かせ絵本の物語の内容や絵の特徴について、絵と文章との関連性等の評価項目から詳細な分析を行うとともに、声の大きさや速度等の読み聞かせ技能についても多角的な検討を行っている。また、大元・青柳（2012）は、読み聞かせ環境の側面の検討として、子どもが絵本に集中して豊かな反応を示すようなグループサイズについての検討を行っている。

このように、絵本の読み聞かせの方法論や環境設定に関する様々な知見が構築されている中、本論では、未だに乳幼児期における実践研究の対象となっていない、「大型絵本」に焦点をあてたい。大型絵本とは、文字通り大きなサイズの絵本のことで、日本では多数出版されているが、その明確な定義は存在しないようである。なお、多くの大型絵本を所蔵する図書館の蔵書説明や大型絵本リスト等には、次のような説明がされている。例えば、佐倉市立佐倉南図書館（2019）では「大型絵本は、大人数の聞き手へ読み聞かせをするのに向いた、大きなサイズの絵本です」、千葉県立中央図書館（2021）では、「大型絵本とは、一度に大勢の子どもたちを対象に読み聞かせをするために、作者の許可を得て拡大製作された絵本です」というものである。

大型絵本についての学術的背景としては、加藤・尾崎・加藤（2006）や加藤・長廣・尾崎（2008）が先駆的に米国から導入した、学校教育教材としてのビッグブックがあげられる。加藤・他（2008）によると、ビッグブックは、アメリカの教師が読み書き教育のために作成した、子どもたち全員が絵や文字を見ることができ大きな絵本であり、ビッグブックを用いた教育はホールランゲージ理論に基づくとしている。ここではこの理論についての説明は省くが、ビッグブックやこの理論に基づいた教育実践は、日本においても、国語科教育（渡辺・三上, 2001）や音楽科教育（栗木, 2016）におい

<sup>1</sup> 帝塚山大学 教育学部 教授

て行われている。また、小学校英語教育において、絵本教材は非常に多く用いられており、その中には Cowley (1997) の “Mrs. Wishy-Washy” 等の、ビッグブックとして代表的なものも活用されている (木原, 2016)。

また、加藤・他 (2008) は、このような教育教材としてのビッグブックと、日本で発売されている拡大製作による大型絵本の違いについて、以下のように述べている。「確かに、日本でも最近たくさんのビッグブックが出版されているが、それらは小型の絵本を単に大きくしただけのものである。したがって、すでに 20 年以上の歴史を持ち、読み書きについての理論と教育現場での豊かな実践から生まれた「ビッグブック」とは大きく異なっている。(加藤・他, 2008, p. 135)」つまり、小型の絵本が拡大されただけの絵本と、教育教材として理論的背景をもつビッグブックとは明確に区別されるべきであるということである。

しかし、日本では多くの通常サイズの絵本が拡大化されている現状があるが、拡大された絵本とビッグブックは明確に区別されておらず、これらの発行年は発行数についての客観的資料は存在しないように思われる。このような資料が容易には入手できない背景としては、出版社が、拡大された絵本を出版するときのシリーズ名として、大型絵本、ビッグブック、ビッグえほん、等の、様々な名称を用いていることがあげられる。例えば、ある出版社からビッグブックというシリーズ名で出版されているのは、教育教材であるビッグブックではなく、拡大された絵本である。また、別の出版社では、通常サイズの絵本のシリーズ名として、大型絵本という名称を用いているという例もある。

したがって、本稿では、日本で出版された大型絵本についての情報を集約し、拡大された絵本や教育目的のビッグブックの現状分析を行うことを目的とする。明らかにする情報は、出版年や発行数、出版社ごとの発行数等である。また、拡大された絵本については、通常サイズの絵本からどの程度拡大されているか (大きさや拡大率) や、通常サイズの初版が発行されてから拡大版が発行されるまでの年数についても分析対象とする。

## 方法

まず、国立情報学研究所 (NII) が提供しているインターネット書物検索システム Webcat Plus を用いて、日本で出版されている大型絵本の名称、作者、出版社、発行年、本の大きさ、についての基本情報を収集した。Webcat Plus は、全国の大学図書館と国立国会図書館の所蔵目録、新刊書等のデータ検索が可能であり、このシステムを用いることで、日本の大型絵本に関する情報のほとんどの部分を収集できることが予想された。なお、検索時期は 2021 年 11 月であった。

検索キーワードとしては、大型絵本の出版社が大型絵本のシリーズ名として用いている名称の中に含まれる 5 つのキーワード (大型絵本、大きな絵本、ビッグブック、大型えほん、ビッグえほん) を用いた。実際のシリーズ名としては、「よみきかせ大型絵本」「大きな大きな絵本」等、様々な名称が用いられている。検索の結果、466 件の情報が収集され、キーワードごとの収集件数は、大型絵本 (308)、大きな絵本 (94)、ビッグブック (48)、大型えほん (9)、ビッグえほん (7) であった。

この 446 件のうち、重複して収集された情報 20 件、大型絵本以外の情報 223 件を除いた。除いた 223 件の内訳は、シリーズ名に「大型絵本」等の名称があるために収集された通常サイズの絵本 (147)、説明文に「大型」や「大きな」等の言葉があるために収集された通常サイズの絵本 (23)、「大型絵本」等の出版社のシリーズ名が収集されたもの (32)、絵本ではない無関連な本やシリーズ名が収集されたもの (21)、であった。

重複や無関連情報を除いた 223 件の情報に、国立情報学研究所 (NII) の CiNii (大学図書館検索システム) を用いた大型絵本のシリーズ名による検索と、出版社ホームページでの確認を行い、54 件の情報を加え、277 件の情報とした。また、277 件の大型絵本の情報それぞれについて、大型化される前の通常サイズの絵本が存在するかどうかを調べ、存在する場合はその発行年と、本の大きさの情報を追加した。なお、本の大きさの情報については、縦幅のみで横幅が記述されていない場合があったため、縦幅のみを分析対象とすることとした。

## 結果

### (1) 大型絵本の分類の定義

227 件の大型絵本は、先行して発行された通常サイズの絵本が拡大され発行されたものと、通常サイズの絵本が存在せず最初から大型で発行されたものの 2 種類に大別された。以降、前者を「拡大絵本」、後者を「ビッグブック」と呼ぶこととする。277 冊の大型絵本のうち、拡大絵本は 236 冊 (85.2%)、ビッグブックは 41 冊 (14.8%) であった。

なお、後者をビッグブックとすることについては、これらの多くが教育目的で作成されており、諸外国においてそれらがビッグブックと呼ばれている (加藤・長廣・尾崎, 2008) ことによる。ビッグブック 41 冊の内容のうちわけは、外国で出版された絵本の日本版 13 冊 (31.7%) , 英語教育 10 冊 (24.4%) , 自然・地理教育 9 冊 (22.0%) , 食育・防災・防犯教育 7 冊 (17.1%) , 日本の絵本 2 冊 (4.9%) であった。

## (2) 大型絵本を発行している出版社と発行年・発行数

### ①出版社と発行数

表 1 は、大型絵本を出版している 35 社について、それぞれ大型絵本全体、拡大絵本、ビッグブックの発行数を示したものである。出版社名については、実名ではなく、大型絵本全体の発行数が多い順から、順位 1 位から 6 位 (A1~A6), 7 位から 11 位 (B1~B6), 13 位から 16 位 (C1~C8), 21 位から 27 位 (D1~D9), 30 位 (E1~E6), のように表示している。また、発行数の多い出版社からの順位、全

表1 大型絵本を出版している出版社と発行数

大型絵本					拡大絵本					ビッグブック				
順位	出版社	発行数	割合 (%)	累積割合 (%)	順位	出版社	発行数	割合 (%)	累積割合 (%)	順位	出版社	発行数	割合 (%)	累積割合 (%)
N=35					n=31					n=10				
1	A1	36	13.0	13.0	1	A2	33	14.0	14.0	1	A1	11	26.8	26.8
2	A2	34	12.3	25.3	2	A3	30	12.7	26.7	2	B2	8	19.5	46.3
3	A3	30	10.8	36.1	3	A1	25	10.6	37.3	3	B4	6	14.6	61.0
4	A4	23	8.3	44.4	4	A4	23	9.7	47.0	3	B5	6	14.6	75.6
5	A5	22	7.9	52.3	5	A5	21	8.9	55.9	5	D3	3	7.3	82.9
6	A6	20	7.2	59.6	6	A6	18	7.6	63.6	6	D7	2	4.9	87.8
7	B1	12	4.3	63.9	7	B1	12	5.1	68.6	6	A6	2	4.9	92.7
8	B2	8	2.9	66.8	8	B3	7	3.0	71.6	8	B3	1	2.4	95.1
8	B3	8	2.9	69.7	9	B6	6	2.5	74.2	8	A5	1	2.4	97.6
10	B4	7	2.5	72.2	10	C1	5	2.1	76.3	8	A2	1	2.4	100.0
11	B5	6	2.2	74.4	10	C2	5	2.1	78.4	全体 41 100.0				
11	B6	6	2.2	76.5	10	C3	5	2.1	80.5					
13	C1	5	1.8	78.3	13	C4	4	1.7	82.2					
13	C2	5	1.8	80.1	13	C5	4	1.7	83.9					
13	C3	5	1.8	81.9	13	C6	4	1.7	85.6					
16	C4	4	1.4	83.4	13	C7	4	1.7	87.3					
16	C5	4	1.4	84.8	13	C8	4	1.7	89.0					
16	C6	4	1.4	86.3	18	D1	3	1.3	90.3					
16	C7	4	1.4	87.7	18	D2	3	1.3	91.5					
16	C8	4	1.4	89.2	18	D4	3	1.3	92.8					
21	D1	3	1.1	90.3	18	D5	3	1.3	94.1					
21	D2	3	1.1	91.3	18	D6	3	1.3	95.3					
21	D3	3	1.1	92.4	23	D8	2	0.8	96.2					
21	D4	3	1.1	93.5	23	D9	2	0.8	97.0					
21	D5	3	1.1	94.6	25	B4	1	0.4	97.5					
21	D6	3	1.1	95.7	25	E1	1	0.4	97.9					
27	D7	2	0.7	96.4	25	E2	1	0.4	98.3					
27	D8	2	0.7	97.1	25	E3	1	0.4	98.7					
27	D9	2	0.7	97.8	25	E4	1	0.4	99.2					
30	E1	1	0.4	98.2	25	E5	1	0.4	99.6					
30	E2	1	0.4	98.6	25	E6	1	0.4	100.0					
30	E3	1	0.4	98.9	全体 236 100.0									
30	E4	1	0.4	99.3										
30	E5	1	0.4	99.6										
30	E6	1	0.4	100.0										
全体		277	100.0											

体の発行数に占める割合、発行数の多い出版社からの発行数の累積割合についても表示している。

まず、大型絵本全体については35社が発行しており、発行数277のうち、順位5位までの出版社で全体の5割以上、10位までで7割以上を発行している。また、発行数3以下の出版社は15社である。拡大絵本についても同じような傾向がみられ、31社の上位5位までで発行数236のうちの5割以上、10位までで8割以上を発行している。ビッグブックについては、発行している出版社は10社であり、発行数41のうちの7割以上を上位3社が発行している。

## ②拡大絵本とビッグブックの発行年と発行数

図1は、拡大絵本とビッグブックが発行された年と発行数を示したものである。まず、大型絵本として最初に発行されたのは1989年のビッグブックであり、拡大絵本の最初の発行は1994年であった。ビッグブックが1989年から1992年までに7冊発行された後に、1994年に最初の拡大絵本が発行されたことになる。すなわち、日本における大型絵本は、もともと大型本として作成されたビッグブックが始まりであり、通常サイズの絵本を大型版にして再出版するという拡大絵本はあとから生まれたものであることがわかる。

拡大絵本は、1994年に最初のものが発行された後、2002年までは年間5冊以下程度の発行数であったが、2003年から急激に発行数が増加し、2008年までの6年間は、毎年18～20冊が発行されている。その後、2009年から発行数は減少傾向に転じ、2011年からは年間10冊以内となっているが、2019年は一次的に発行数が伸びている。以上のことから、拡大絵本の発行数のピークは、2003年から2008年までの6年間であったことがわかる。これに対してビッグブックは、1989年から2020年まで、2011年を除き、その発行数は年間5冊以下にとどまっており、ほとんど発行されていないことがわかる。

## ③通常サイズの絵本が拡大絵本として発行されるまでの年数

図2は、通常サイズの初版絵本が発行されてから拡大絵本として発行されるまでの年数と、発行数である。例えば、通常サイズの絵本が発行された同年に大型絵本が発行されたとすると年数は0となり、3年後発行されると3となる。図2から、通常サイズが発行されてから10年以内に拡大絵本となっているものが多いことがわかる。10年以内の発行数は、129冊(55%)であった。また、通常サイズが発行されてから、30年から50年以上経過してから拡大絵本として発行されるもの(38冊、16%)もあり、昔から読まれ続けている、いわゆる名作絵本が拡大絵本となっているといえる。

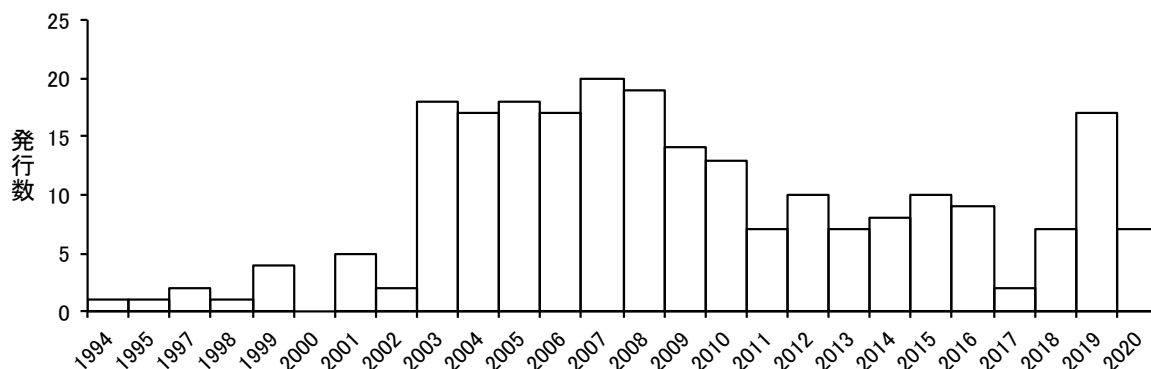


図1-1 拡大絵本の発行年と発行数

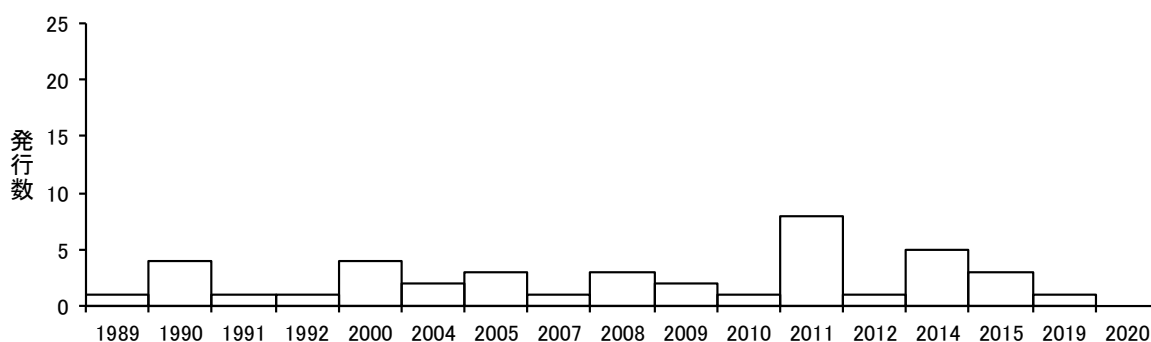


図1-2 ビッグブックの発行年と発行数

### (3) 大型絵本の大きさと拡大絵本の拡大率

#### ①大型絵本の大きさ

図3は、拡大絵本とビッグブックの縦幅 (cm) と、その縦幅である本の発行数を示したものである。まず、236冊の拡大絵本の記述統計量は、平均値 45.9、標準偏差 11.3、最小値 29、最大値 116、最頻値 50であった。なお、図3からもわかるように、一部極端に縦幅が大きい本 (116 cm) が4冊あり、それらを外れ値として扱った場合の232冊の平均値は 44.7、標準偏差 6.5、最大値 59であった。以上のことから、拡大絵本の縦幅はおおよそ 30 cmから 60 cmの間であり、50 cmの本が最も多く発行されていることわかる。50 cmの本は67冊 (28%) であった。また、41冊のビッグブックについての記述統計量は、平均値 47.6、標準偏差 9.2、最小値 30、最大値 62、最頻値 37であった。

#### ②拡大絵本の拡大率

拡大絵本 236冊について、拡大絵本の縦幅を通常サイズの絵本の縦幅で割り拡大率を算出した。図4は、拡大率とその拡大率の絵本の発行数を示したものである。拡大率についての記述統計量は、平均値 1.98、標準偏差 0.52、最小値 1.30、最大値 5.30、最頻値 1.9であった。図4から、1.7倍から2.0倍までに拡大されるものが多いことがわかり、これらの率で拡大されたものは合計 170冊 (72%) であ

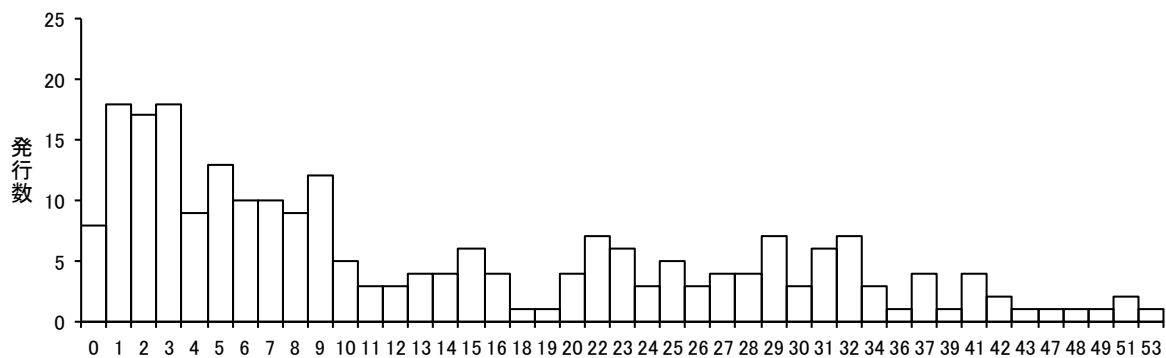


図2 通常サイズの絵本が拡大絵本として発行されるまでの年数

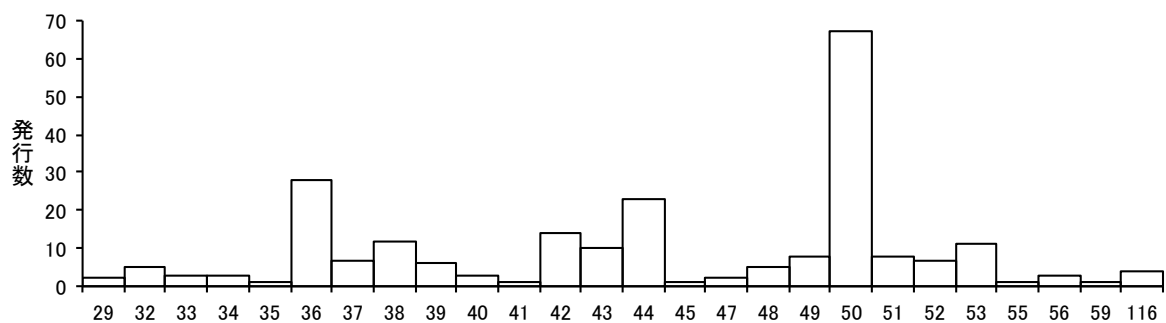


図3-1 拡大絵本の縦幅 (cm) とその縦幅の拡大絵本の発行数

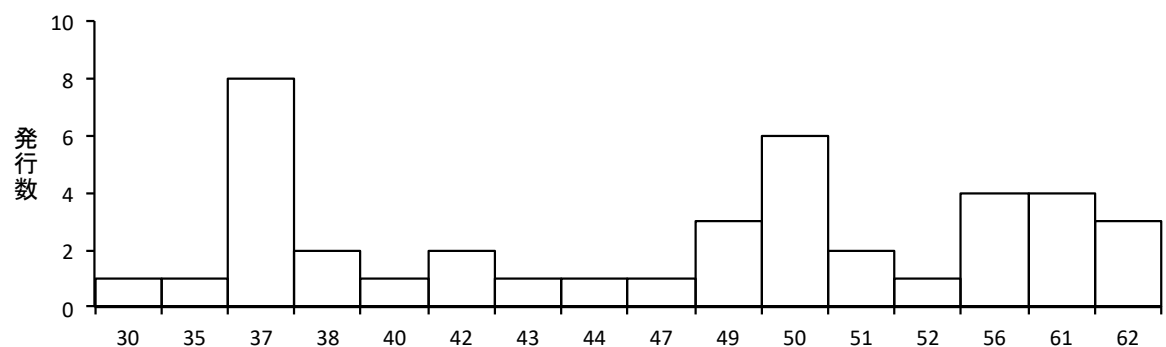


図3-2 ビッグブックの縦幅 (cm) とその縦幅のビッグブックの発行数

った。また、一番多い拡大率は約2倍であることがわかる。1.9倍と2.0倍に拡大された本は合計108冊(46%)であった。これに対して、1.6倍以下(20冊, 8%)や、2.5倍以上(12冊, 5%)に拡大されるものは少なくなっている。

### ③発行部数上位6社の大きさと拡大率

表2は、拡大絵本の発行部数の上位6社(A1～A6)の、それぞれの縦幅(表2-1)と拡大率(表2-2)における発行数である。表2から次のようなことを読み取ることができる。まず、A1社は、ほぼ全ての本を縦幅50cmにそろえており、その結果、拡大率が1.9倍から2.8倍の間にばらついている。A2社は、縦幅の違いによって、おおおよそ2種類の拡大率を設けている。A4社は、縦幅も拡大率も多くの値にばらついており、本ごとに縦幅や拡大率を変えている。このように、出版社によって、拡大絵本の大きさや拡大率についての編集方針が異なることが予想される。

### まとめと今後の課題

本稿では、日本において2021年11月までに発行されている大型絵本277件の情報について、発行年、発行数、拡大率等の分析を行った。大型絵本は、通常サイズの絵本が拡大され発行されたもの(拡大絵本)と、通常サイズの絵本が存在せず最初から大型で主に教育目的で発行されたもの(ビッグブック)の2種類に大別され、それぞれの発行数の状況や、拡大絵本の一般的な大きさや拡大率が明らかにされた。

今後の課題としては、以下の2つが考えられる。まず、1つめとして、諸外国のビッグブックや拡

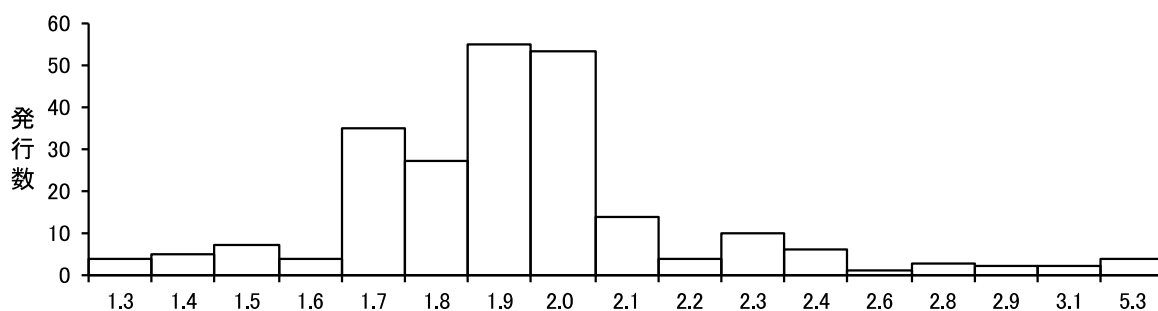


図4 通常サイズの絵本から拡大絵本への拡大率と発行数

表2-1 発行数上位6社の拡大絵本の縦幅(cm)と発行数

出版社	縦幅(cm)																			合計	
	35	36	37	38	40	42	43	44	45	47	48	49	50	51	52	53	55	56	59		116
A1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24	1	0	0	0	0	0	0	25
A2	0	12	0	0	0	0	0	8	1	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	33
A3	0	14	0	1	0	9	0	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	30
A4	0	0	0	0	0	1	6	0	0	0	0	0	1	5	1	1	1	2	1	4	23
A5	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	5	0	15	0	0	0	0	0	0	0	21
A6	1	0	1	7	0	0	0	5	0	1	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	18
合計	1	26	1	8	1	10	6	13	1	1	5	5	56	6	1	1	1	2	1	4	150

表2-2 発行数上位6社の拡大絵本の拡大率と発行数

出現値	拡大率															合計
	1.4	1.7	1.8	1.9	2	2.1	2.2	2.3	2.4	2.6	2.8	2.9	3.1	5.3		
A1	0	0	0	1	10	3	0	7	1	0	3	0	0	0	25	
A2	0	12	0	20	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33	
A3	1	1	5	12	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	
A4	0	1	1	4	10	0	0	0	0	0	0	1	2	4	23	
A5	0	1	1	2	15	0	2	0	0	0	0	0	0	0	21	
A6	0	3	6	1	1	0	0	1	5	1	0	0	0	0	18	
合計	1	18	13	40	48	3	2	8	6	1	3	1	2	4	150	

大絵本の発行状況を明らかにする必要がある。本稿でも述べたように、元来ビッグブックはアメリカで教育教材として作成されたものである。しかし、諸外国においても、日本のように、通常サイズの絵本を拡大することが行われているか、行われているとすれば、どの程度発行されており、保育現場等でどの程度利用されているかについても明らかにする必要がある。2つめとして、拡大絵本の乳幼児保育・教育実践への応用に関する理論構築が必要である。拡大絵本と通常サイズの絵本とでは、子どもに与える影響や、効果的な読み聞かせ方法がどのように異なるのか等、経験的な知見はあるのかもしれないが、系統的な実践研究が行われていないのが現状である。今後、様々な角度からの検討が必要であろう。

## 引用文献

- 會澤のはら・片山美香・高橋敏之 (2019). 幼児を対象とした集団における絵本の読み聞かせに関する研究動向 岡山大学教師教育開発センター紀要, 9, 215- 228.
- 雨越康子・森下正修 (2020). 幼児期の集団および家庭における絵本の読み聞かせと認知能力 日本教育工学会論文誌, 43, 339-350.
- Cowley, J. (1997). Mrs. Wishy-Washy. Chicago: McGraw-Hill.
- 加藤泰彦・尾崎恭子・加藤承彦 (2006). ビッグブックとは何か? : その理論と実践 チャイルド本社
- 加藤泰彦・長廣真理子・尾崎恭子 (2008). 幼児・1年生におけるビッグブックの実践的研究 : 米国におけるビッグブックの理論と実践の調査報告第1集, 中国学園紀要, 7, 131-138.
- 木原美樹子 (2016). 小学校英語教育における絵本の活用について : 絵本の選び方を中心に 中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要, 50, 55-62.
- 栗木陽子 (2016). 音楽科におけるビッグブックの活用 : 教科書との併用に着目して 音楽文化教育学研究紀要(広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学講座), 28, 83-91.
- 国立情報学研究所 CiNii books (<https://ci.nii.ac.jp/books/?l=ja>)
- 国立情報学研究所 Webcat Plus (<http://webcatplus.nii.ac.jp/>)
- 大元千種・青柳恵里香 (2012). 絵本に対する幼児の関心に及ぼす読み聞かせのグループサイズの影響 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要, 7, 167-178.
- 佐倉市立佐倉南図書館 (2019). 佐倉南図書館所蔵 大型絵本ブックガイド 8訂版  
<https://www.city.sakura.lg.jp/0000012071.html> (閲覧日 : 2022. 2. 2)
- 玉瀬友美 (2012). 「保育」の教育における読み聞かせ経験 : その教育心理学的研究 風間書房
- 千葉県立中央図書館 (2021). 千葉県立中央図書館 児童資料室 大型絵本リスト  
<https://www.library.pref.chiba.lg.jp/kids/dl/oogataehon.html> (閲覧日 : 2022. 2. 2)
- 並木真理子 (2012). 幼稚園における絵本の読み聞かせの構成および保育者の動作・発話が幼児の発話に及ぼす影響 保育学研究, 50, 165-179.
- 渡辺聡・三上勝夫 (2001). ホール・ランゲージ運動のビッグ・ブックにヒントを得た入門期国語教育の「読み」方指導の研究 北海道教育大学紀要, 教育科学編, 52, 1-16.